

2日獣発第139号

令和2年9月30日

地方獣医師会会長 各位

公益社団法人 日本獣医師会
会長 藏内勇夫
(公印及び契印の押印は省略)

第32回日本動物児童文学賞の審査結果について

このことについて、第32回日本動物児童文学賞審査委員会において
厳正なる審査の結果、多数の応募の中から別紙のとおり入賞作品を決定
したのでお知らせします。

本件内容の問合せ先

日本獣医師会事業担当 山本・長野

TEL 03-3475-1601



【別紙】

第32回日本動物児童文学賞入賞作品

【日本動物児童文学大賞】

「君がいるから、うまく読めるよ」

西村 ひとえ（山口県）

<受賞理由>

読書サポート犬や引退後の盲導犬などのやや難しいテーマを取り上げながらも、動物の人間社会への貢献や動物福祉について考え、自ら成長する主人公の姿は感動を呼ぶものがあり、「犬の幸せとは？」を考えるきっかけとなる良作だった。一方、作品内で紹介された動物愛護センターでの収容期間は、全国の動物愛護センターで実際に行われている実状とは異なる点や、最後に発表した調べ物学習での主張が主人公の設定年齢にしてはやや大人びているように感じた点など、違和感を抱く部分もあった。しかし、人のために働く犬の老後にスポットを当てた題材は希有で、文章の展開も軽快な力作であり、本賞の大賞にふさわしい作品である。

【日本動物児童文学優秀賞】

「猫の乗客」

石田 七海（神奈川県）

<受賞理由>

通学列車に乗り込んできた一匹の白猫と少女の物語。導入が少しミステリー仕立てで引き込まれ、興味深く読まされてしまう。動物愛護の観点からは、野鳥への餌やりや、屋外へ自由に出入りができる環境での飼育、また、主人公と再会した猫に対し、以前約束したからと言って自分の家に連れて帰るといった判断等、やや問題がある部分は散見された。しかし、登場人物たちの動物に対する自然な優しさが随所で表現されており、入院している人の心を動物がケアする描写など、人に対する動物の重要性を唱える作品となっている。

「ツバメ飛ぶころ」

小粒 すずめ（千葉県）

<受賞理由>

心に傷を持つ男性と、動物好きの少年のやり取りが温かく描かれているさわやかな作品。少年は自然から新しい世界の見方を知り、人間に不信感を持った男性は、人と動物の関わりから、人と人との関係性を見つめなおす構成となっている。動物を通じた人間の成長と再生の物語。見た目では判断できない人のやさしさも大事さも描かれており、優秀賞にふさわしい。

【日本動物児童文学奨励賞】

「カラス de カルタ」

のだ ますお (東京都)

<受賞理由>

偏見の多いカラスを題材にした秀作。カラスに対して恐怖を抱く少年が、夏休みの宿題を通してカラスにまつわる雑学をいろいろと学んでいくテンポの良いストーリー。読者も楽しみながらカラスの生態が学ぶことができる。ただ、結末がやや淡泊に終わった点は残念であり、もう少し動物愛護精神の醸成につながるストーリー展開があると良かった。

「いっそ世界が猫だったら」

まきうち れいみ (東京都)

<受賞理由>

重度の障がいのある兄を疎ましく思っていた主人公が、子猫を通して兄との関わりに対する葛藤が描かれた、考えさせられる作品。動物との関わりだけでなく、動物を通じた人との関係について、主人公のポジティブな変化と迷いの両面を表現している点が良かった。よい話ではあるが、動物の愛護というよりも、障がいを持った兄に主軸がおかれており、動物の存在感が薄くなってしまった点が残念。

「親友の犬は…」

ちゃーちゃん (岩手県)

<受賞理由>

主人公と親友の男子はそれぞれ愛犬を飼っているが、主人公はリアルな犬を、親友はAIの犬を買ってもらい、それぞれの魅力を知る。AI犬の機能や活用性の高さがあらわになる一方で、生身の動物の温かさや素晴らしさに気が付く情景がうまく描かれている。今の時代にマッチした物語で、完璧なものにはない動物の魅力や、動物と人との間の愛情を思い起こさせる。文が長く読みにくい面もあるので、前置きを短くし、本題に焦点を絞るとなお良い。

「老犬ドングリがのこしてくれたもの」

山下 厚 (千葉県)

<受賞理由>

隣家で飼われている老犬ドングリと主人公の出会い、そしてドングリの死を通して人が交流する物語。物語の前半はドングリとの物語だが、後半には隣家のお姉さんの経営する牧場の話へと一転する。牧場の実情や牛の専門性が高い学術的な内容が羅列されており、児童文学として対象年齢の子どもたちからの理解を得ることは難しいのではないか。特に、物語終盤は作者の主張が全面的に出てしまい、動物愛護としての観点が薄れてしまったように感じた。会話を短くし、説明調の文章を工夫すると良い。

「マリィからの手紙」

岡田 陽子(千葉県)

<受賞理由>

小鳥が死んで悲しむ主人公が、偶然見つけた空き地にいる子犬と遊ぶようになる。小学2年生の少女と友達、ひと夏の子犬との物語。全体を通して、生き物を大切に思う作者の温かい視線が感じられるほのぼのとした作品。物語はとても楽しく、子犬のマリィと主人公たちとの触れ合い、やり取りに読者はワクワクして読み込める。ただ、主人公が小学2年生に設定されているが、使用されている漢字が難しすぎるので、対象年齢を意識した言葉選びをする必要がある。